
DEATH NOTE 新たなる神

坂田銀時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH NOTE 新たなる神

【Nコード】

N31800

【作者名】

坂田銀時

【あらすじ】

キラが死んで再び悪が世界を染めようとしていた。だが、キラが死んで2年後犯罪者たちが心臓麻痺で次々に死んでいった。新たなるキラが再び現れたのであった。

プロローグ

「チエックメイト」

Ｌが一冊のノートをろうそくの火につけようとした。

「おい、待て！」

Ｌが燃やそうとしているノートの持ち主、死神のリユクがＬに言った。

「そのノートを燃やしても、お前の寿命は延びないぞ！」

「構いません、私はこれで」

再びノートをろうそくに近づけた。

「まあ、待て！ 月はこのノートさせあれば神になれるって言うたぞ！ お前は興味ないのか？」

「・・・・・・月君のあの死に方が神の死に方ですか？」

「いや、それは、その、あの」

リユクは動揺していた。

「私は後２３日しか生きられません。もうこれが生涯最後の事件です」
そう言うＬは、ノートにろうそくの火をつけた。そして、ドラム缶に放り込んだ。一冊目を放った後、二冊目を火の中に放り込んだ。そして、二冊のデスノートは灰となったのであった。そして、ノートを燃やしてから２３日後、Ｌは静かに息を引き取ったのであった。
Ｌが死んで、２年後世界は再び悪が染まろうとしていた。キラの裁きがなくなったこといい気に、犯罪を犯すものが次々出たのであった。だが、ある日犯罪を犯した者が次々に心臓麻痺で死んでいったのであった。毎日毎日、犯罪者が心臓麻痺で死んでいったのであった。世界中の犯罪者が次々に死んでいったのであった。

ブログ（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

降臨

「この世は、腐りきった世界だ」

俺はいつもそう思っていた、キラによる裁きがなくなってから毎日毎日犯罪を犯すものが次々に出ている。そして、その犠牲がいつも出る。もうこの世は終わったといつも思っていた。だが、自分が思っていたことが変わるとはまだこの時には気づいていなかった。

それは、突然来たのであった。学校の帰り、いつも通学路が工事してため俺はいつもとは別の道で帰ったのであった。そして、俺がたまたま空地をちらっと見たときなんか黒い四角形が空から落ちてきた、俺は、その落ちてきたものは何か知リたかったから俺は空き地に入って、黒い四角形の前にいた。それは、ノートだった。

「なんだ、これ？ ノートか、なんでこんなものが空から落ちるのか？」

俺は、そう言いながらその黒いノートをとった。そして、表紙には

「DEATH NOTE」と書かれていた。

「DEATH NOTE？ 意味が分かん」

普段なら、こんなもの拾わないんだがなぜか俺は、そのノートを持ち帰ったのであった。何か不思議な力を感じたのであった。そして家に帰り自分の部屋に行きそのノートの最初のページを開いたのであった。

「使い方？ このノートに名前を書かれた人間は死ぬ、名前を書かれる人物の顔が頭に入っていないと効果は得られない。故に、対象となる人間の名前と顔が一致する必要があるため、同姓同名の別人は死なない。名前の後に人間界単位で40秒以内に死因を書くと、そのとおりになる。死因を書かなければ、全てが心臓麻痺となる。死因を書くと更に6分40秒、詳しい死の状況を記載する時間が与えられる。ふん、遊びとしては結構完成度高いじゃないか」

俺は、小学生が遊びに使っていたノートだろうと思った。だが、そ

の時に遊び心が出て俺はテレビで流れていた殺人の容疑で捕まっていた鏡太郎の名前を書いたのであった。

「どうせ、死ぬわけないだろう」

と言い俺は、ノートを引き出しにしまったのであった。

そして翌朝、俺は朝ごはんを食べながら新聞を見ていたそして総合面のところを見て俺は驚いた。そこには、昨日書いた鏡太郎が心臓麻痺で亡くなったと書いていた。俺は目を疑った。まさか、あのノートに書いた人間死ぬなんて、ありえないと思った。そして、俺は部屋に戻り引き出しからノートを出した。

「このノート、本物か？」

「ああ、本物だ」

「誰だ!!」

俺は後ろ向くとそこには、人間ではないものがいた。

「お前、誰だ!？」

「死神のリユウだ高橋魁よ、そしてノートの落とし主だ」

「このノートの」

「そうだ、だがもうそのノートはもうお前の者だノートが人間界に落ちた時点でノートは人間界のものになるだからそれは、もうお前のものだ」

「そうか、じゃあこのノートに名前を書かれたら書かれたの人間は死ぬのか？」

「そうだ」

俺はその言葉を聞いた時あることを思いついた、そして俺はうつむいた。そして、くすくすと笑っていた。

「何、笑ってんだ？」

「面白いことを考えたんだ」

「面白いこと？」

「このノートで世の中を変えてやる!! 悪のない理想の世界に変えてやる」

「やっぱり、お前もそう言うんだな」

「やっぱりってどういうことだ！」

「以前に、そのデスノートは8年前にこの人間界に落ちてるんだ。そしてそのノートを持った人間はお前と同じ考えをしていた、そしてデスノートを使って神になろうとした」

「まさか、その拾った奴って」

「そうだ、その時にノートを拾った奴がキラだ。悪のない世界を作るって言うってたなあ」

「キラがこのノートで……」

「だが、そいつは2年前に死んだ」

「死んだ！！　どういうことだ！！」

俺はリュウに聞いた。

「キラが拾ったノートの落とし主リュウクって奴にリュウクが持っていたノートに書かれて死んだんだ」

「死神が書いたのか？」

死神はうなずいた。

「まさかとは思うが、リュウも俺の名前をリュウが持っているノートに書くっていうことするのか？」

「そんなことはしない」

リュウは否定した。

「そうか、キラは死んだのか……」

「なんだ」

「その時に死んだ奴って誰だ？　もう死んでるんだから教えてくれたっていいだろう」

「……夜神月という奴だ」

「夜神月か、珍しい名前だな」

「それといいことを教えてやろう」

「？」

「しはもうこの人間界にはいない」

俺は驚いた、キラ事件の捜査をしていた名探偵しが死んでいたことに驚いた。

「しは、夜神がキラだと断定しキラとの最終決戦をするために自分でノートに名前を書いた」

「ちよつと待て、ノートは一冊しかないんじゃない」

「その時はノートは2冊存在していた。だが2冊ともしが処分した」「そうだったのか、まあとにかくキラは死んだのか。なら俺がキラの意思をついでやる俺が二代目のキラになつていやる」

そうリュウに言い、俺はノートを机に置きノートを開き犯罪者の名前を次々に書いていった。世界中の犯罪者の名前を次々にノートに書いていった。

「リュウ、君はいいものを落としてくれたね。これで、僕が真の神になれる」

降臨（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

」

キラと思われる殺人が世界のあちこちで発生した、これをうけて国際刑事警察機構は緊急の会議を招集した。

「この一週間で分かっているだけで56人が心臓麻痺で亡くなっています、そして死亡者は全員犯罪者だということです」

ある国の代表者が一週間で死亡した人数を報告した。

「心臓麻痺という事は、いよいよキラが復活したのか？」

「それはないだろう、キラは死んだのだから」

「しかし、こんなことができるのはキラしかないだろう」

「いや、しかしそれは」

各国の代表がキラによる犯行かはたまた、たまたま全員心臓麻痺だったなのかということを議論していた。そしてある国の代表が

「皆さん、私に考えがあります」

「なんだ？」

別の国の代表者が言った。

「最近、噂になっている」に次ぐ名探偵」に解決してもらうしかありません」

「」って誰だ？」

「」とは名前も居場所も顔も知らないだが、世界中の難事件や迷宮入り事件を解決してきた、そして今も」に近い探偵だといわれています」

「しかし、居場所が分からないのに一体どうやってコンタクトをとるつもりだ！？」

「「」はもうこの事件の捜査を始めています」」

会議場にその声が響いた、そして一人の男が議長席の前に現れた。

「誰だ！お前は？」

「私は鈴木と言います、今日は」の代理としてきました。どうかお静かに聞いてください、今から」のメッセージをお聞かせします」

そういうと鈴木はパソコンをとりだしCDみたいのをパソコンに挿入し再生した。

「国際刑事警察機構の皆さん、はじめまして」です。この事件は世界を又にしたキラによる凶悪な殺人事件です、この事件を解決するためには国際刑事警察機構はもちろん世界中の機関の協力が必要です、特に日本警察の協力を強く要請します」

Ｊが言った後、日本代表が

「どうして、日本なんだ!？」

「それは、この事件で最初に亡くなったのが日本だからです、そしてキラは日本にいる可能性が高いからです」

「何を根拠で？」

「それは、近々キラとの直接対決でお見せすることができます」

「直接・・・対決」

「とにかく、今回の事件の捜査本部は日本に置きます」

「・・・分かった」

「では、後ほど」

Ｊ（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

衝突

「Ｊがキラ事件の捜査本部を日本に設置することを決めて数日後、キラと思われる殺人事件が世界のあちこちで発生しキラにおびえてキラを認める国も出てきた。」

「今度は、フランスがキラを認めたか」

机に、デスノートを広げてテレビのニュースでフランスがキラを認めたと報道しているところを見ていた。

「お前は、これをしたかったのか？」

リュウがリンゴを食べながら俺に聞いてきた。

「いや、これはまだ新世界の創造が始まったにすぎないよりリュウ。」

俺の目的はただ一つ」

俺は、シャーペンを手にとって犯罪者の名前をデスノートに書きながら、リュウに言った。

「犯罪を犯すものがない、理想の社会を築く！！」

魁がリュウにそう言った後、テレビの番組に突然番組内容の変更というテロップが出て報道番組に変わった。

「番組の途中なんですが、ＩＣＰＯから世界同時生中継をお送りいたします」

「インターポールが！」

俺は驚いた、インターポールが全世界に同時生中継をすることなんてないだろうと思っていたからである。

「それでは、始めます」

そう、アナウンサーが言う画面がある一人の男を映し出していた。「私は全世界の警察を動かせる唯一の人間、Ｊ・ジョージ通称Ｊです。相次ぐ犯罪者を狙った連続殺人事件は、ある一人の人間で行われています。それは、キラです」

「！？こいつどうしてキラだという事がわかってるんだ！？」

「これは絶対に許されない凶悪な事件です、よって私はこの犯罪の

首謀者キラを必ず捕まえる。キラお前がどのようなことを考えているなんて想像はつくが、だがお前がやってることは悪だ!!」

「!?!?・・・悪だと」

魁は椅子から立ち上がりそしてテレビを指差し言った。

「俺は正義だ、悪におびえる者たちを救い誰もが理想とする世界を作る神になる男だ、それに逆らう者こそが悪だ」

そう言うとき魁は、シャーペンでデスノートのどこに持って行きそして「甘いぜ」、顔と名前を全世界にさらけ出しなんて」

そう言うとき魁は、デスノートに「ジョージの名前を力を込めて書き込んだ。」

「俺に逆らおうとどうなるかな」、全世界が注目しているよ。全世界に見せつけてやるキラの復活を」

そう言うとき魁は近くにあった時計を見て秒読みを始めた。

「後、6、5、4、3、2、1」

魁が一と言った瞬間、画面に映っていた男が胸を抱えて頭を思いっきり机にぶつけそのまま起き上がらなかった、そしてその周りにはスタッフが集まり男を囲んで「しばらくお待ちください」というテロップが流れた。

「どうした、なんか言ってみろよ!!」

その瞬間、画面が」と書かれた画像に変わった。

「信じられない、まさかと思って試してみたがまさかこんなことがキラ、お前は直接手を下さずに人を殺せるのか?ま、これも計算のうちに入っていたけれど、まさかこんなにうまくいくとは思わなかった」

「なんだ、こいつは!?!」

「キラ、お前は二年前のキラとは違うな」

「!?!」

「今までのキラとは違う、今までのキラだったら二年前にこのひっかけ番組やられたことくらい覚えているはず、だがお前は今普通にこの時間帯に死刑となるこの犯罪者を殺した。つまりお前は二年前

のキラとは違う」

「こいつ!？」

「だが」 という私は存在している、これからが始まりだキラお前を必ず逮捕しそして、死刑台に送ってやる!!」

そう」が言った後、画面は砂嵐に変わり画面を通じての」の推理が終わったのであった。

「・・・・・・俺を死刑台に送るだ!! いいだろうって受けてやるうじやないか」!!」

衝突（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日になります。

集結

「Ｊがキラに対して、宣戦布告をして数日後Ｊは、キラ逮捕のために捜査本部となる日本に移動したのであった。そして、日本についてＪは早速、旧キラ事件の日本捜査本部の捜査メンバーを本部に召集したのであった。

「こちらにどうぞ」

「本当に我々をＪが呼んだのか？」

「はい、そうです」

と夜神と鈴木が話していた。そして鈴木が案内した部屋の中に入る
と一人の男がいた。

「Ｊ、夜神さんその他の旧日本捜査メンバーをお連れしました」

「ごくろう、鈴木」

そうＪが言うとは、すたすたと歩いて旧捜査メンバーの前に現れた。

「皆さんはじめまして、私がＪです」

と旧捜査メンバーの人たちにあいさつしたのであった。

「はじめまして、夜神だ」

「松田です」

「相沢です」

と夜神の後に続いてその他のメンバーがＪにあいさつをした。そして、全員があいさつし終えたと

「それで早速なんだが、どうして旧キラ事件の日本捜査本部の捜査メンバーを召集したのかを教えてくださいませんか？」

と夜神がＪに聞いた。

「皆さんを呼んだのは、皆さんに今のキラ事件の日本捜査本部の捜査メンバーとして参加してほしいからです。皆さんは旧日本捜査本部のメンバーとしてキラを追っていましたよね、そしてキラの正体をつかみそして、キラと直接対決をした。そうですね夜神さん」

夜神は何も言わずに首を縦に振った。

「追いつめたまでは良かったのですが、キラは何らかの理由で死んだのですよね」

「な！？どうして、そのことを知っているんだ！」

夜神が驚いた表情を言う。

「しが生きていたころ、私のところにキラは死んだという連絡があったからです」

「君は、しとどういった関係なんだ」

「私としは、お互いに知っている情報を互いに提供し合っていた仲です。でも、さすがにキラがどうやって人を殺していたかはさすがに教えてくれませんでした。が……夜神さん」

「は、夜神の方を見て」

「2年前のキラはどうやって人を殺していたを教えてください、そして、捜査本部に参加してください」

夜神は、下を向いて黙りこんだ。そしてゆっくりと顔を上げ言った。

「ノートだ」

「ノート？」

「そのノートに名前を書かれた人間は、必ず死ぬというノートだ」

「そんなノートが存在していたのか、それでそのノートは今？」

「ノートはしがすべて処分した」

「第二のキラも同じ方法で？」

「そうだ」

「なるほど、情報の提供ありがとうございます」

「いや、これくらいはそれと捜査本部への参加なんだが」

「はい」

「私たち一同、参加させてもらいたい」

夜神の後ろでは、それにうなずいていた。

「大歓迎です、心から感謝します」

と言った後、夜神としは双方の手を握って握手をしたのであった。

集結（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日になります。

場所

「が旧日本捜査本部のメンバーと合流したころ、デスノートに犯罪者の名前を書いていた魁は手を止め、リュウに質問した。

「なあ、リュウ」

リンゴを食べながら、振り向くリュウ。

「どうした、魁？」

「確かお前は、このデスノートに触らないと見えないんだよな」

「そうだ、それがどうした」

「だったら、このノートの隠し場所を考えないとな」

「隠し場所？」

リュウが魁に聞いた。

「そうだ、今まではこのノートがほかの人に見つかっても大丈夫かと思っていたが、触られた時点でリュウの姿が見えるのならちゃんとした、隠し場所を考えないとね」

そう言うとき魁は、ノートを閉じてノートをバックに入れた。

「さてと、一体どこに隠そうかね」

と言いながら、魁はベットに横になった。

「なあ、魁」

「なんだ、リュウ？」

「ノートの隠し場所に困っているのなら、良いことを教えてやろう」「いいこと？」

そう言うとき魁は、ベットから起き上がった。

「前のキラはデスノートをどこに隠していたと思う？」

「そんなこと、俺が分かるわけないじゃん」

魁は淡々と言った。

「前のキラは、机の引き出しの底を二重にしてその底にシャーペンの芯の大きさの穴を開けていて、そこに芯を差し込むと開く仕組みをつくってそこにノートを隠していた」

「どうして、そんなことを知っているんだ？ 確か、前のキラについていた死神は違うはずだ」

「そのキラについていた、死神にその話を聞いたんだ」

「そうか、いいことを教えてくれてありがとう。リュウ」

そう魁がリュウに言うとき、魁は、財布を持って部屋から出た。そして、そのまま自転車に乗って近くのホームセンターに行きいろいろな物を買って家に帰った。そして家に帰るなり、それを釘で打ったり、ボンドをひつつけるなりいろいろな作業をした。

「何やっているんだ？」

リュウがベットに横になって、リンゴを食べながら魁に聞いた。

「ノートの隠し場所を作っているんだ、前のキラと同じ方法でノートを隠すつもりだ」

「そうか、ま、がんばれ」

と言いつつリュウは、リンゴを食べていた。そして、数分後

「ようやくできた」

と疲れ気味に魁が言った。

「お！できたか」

とリュウが言った。

「ああ、割と簡単にできたよ、リュウの話をも元にして作ってみたよ」

と魁は自慢げに言った。

「そうか、これでノートは大丈夫だな」

「まあね、でも、本当に危ないのは旧キラ事件の日本捜査本部のメンバーと」が手を結ぶことだ。前のメンバーは、デスノートの事を知っているんだろう？」

「そうだ、以前のメンバーは全員知っている」

「厄介だな、さてどうしようかねえ」

と言いつつ魁は再びノートをバックから取り出してノートに犯罪者の名前を書き始めた。

場所（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日になります。

展開

魁がデスノートの隠し場所を作る終えたころ、キラ事件の日本捜査本部のメンバーはある場所に連れてこられていた。

「J・・・・・・ここは」

夜神が驚いた顔をしてJに聞いた。

「ここは、あなた方が初代のキラを追っていた時に使われていた場所です」

「どうして、この場所が分かった？ここは私たち以外、誰も知らないはずだ」

と相沢が、身を乗り出して聞いた。

「以前、まだしが生きていたところに聞いたんです」

Jは淡々といい、近くにあった椅子に座り

「みなさんは、たしかノートに触ったことがあるのでしたよね？」

「そうだ」

「でしたら、まだ死神の姿が見えるのでは？」

とJは、捜査メンバー全員に聞いた。

「いや、それが今では見えないんだ」

夜神が、申し訳そうな顔をしていった。

「ま、そうでしょうね。ノートは、すべて焼却されたのですから」

「すまない」

夜神が謝る。

「いえ、それはしょうがないことですから」

Jが夜神に言くと、机の上に置かれていた電話が鳴った。

「お！待っていたものが来たようですね」

と言いながら、Jは受話器を取った。そして話が終わると受話器を戻し捜査メンバーがいる方向を向き

「みなさん、今から皆さんが驚くものをお見せいたします」

そう言くと、部屋のドアが開きスーツケースを持った鈴木が入って

きた。

「J、例のものがワイミーズハウスから届きました」

「ワイミーズハウスって、あのワイミーズハウスですか!」

松田が、驚いた顔をしていった。

「そうです、鈴木スーツケースを開けてください」

「はい」

鈴木がそう言うと、鈴木はスーツケースを開けた。中には、一枚の紙が入っていた。

「こ、これは?」

と相沢が頭をかしげて言った。

「これは、ノートの一部です」

「一部だと、でもノートは焼却されたはずだ!それなのにどうして夜神は、自分の目の前で起きていることを疑った。」

「たしかにノートは焼却されました、しかしLは、万が一、ノートが再びこの世に降りた場合に備えてあえて一ページだけ抜き取ってワイミーズハウスに預けたと言っていました」

「Lが……」

「さあ皆さん、どうぞこの紙に触ってください」

「言いながら」は、スーツケースに入っていた紙を取って捜査メンバーに見せつけた。

「分かった」

と夜神が言うと夜神はJが持っている紙に触った。そしてそのあとに続くように次々に紙に触っていった。

「全員、触りましたね。これで今あなた方は、死神の姿が見えます」

「そうだ」

「それじゃ、いよいよキラを追い詰めていきましょうか」

「はい!」

と捜査メンバー全員が言った。

展開（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の月曜日です。

死神（前書き）

「DEATH NOTE 新たなる神」の作者坂田銀時です。このたび、3月11日の宮城県三陸沖を震源とした「東北地方太平洋沖地震」におきまして、津波などで多くの行方不明者・負傷者・死者が多く出ています、被害にあわれた皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、犠牲になられた方々とご遺族の皆様に対し、深くお悔やみを申し上げます。一日でも、早い復興を心からお祈りいたします。

死神

デスノートの一部を入手し、キラ逮捕に向けて大きく展開したころ。魁は、犯罪者の名前を次々デスノートに書いていった。

「順調みたいだな」

リュウがリンゴを食べながら言った。

「ああ、主だった犯罪者はすべてノートに書いたと思うよ。あとは、少しずつ犯罪のレベルを下げていって悪のない初代のキラが造ろうとした平和な世界が出来る」

「まあ、がんばれや」

リュウはそう言い、リンゴを食べ終えた。

「なあ、リュウ。このデスノートって本当にこの一冊だけなんだろうね」

シャーペンを机に置いて魁がリュウに聞いてきた。

「そうだ。今、人間界に存在しているのはそのノートだけだ」

「そうか」

そう言っただけで、再びシャーペンを持ってノートに犯罪者の名前を書きだそうとした時

「お前、なんでいるんだ！」

リュウが突然、驚いた表情をして言った。

「どうした、そんなに驚いた顔をして」

と魁が、笑いながら言っている。と魁の頭の上に何かが落ちてきた。

「なんだ……っな！」

魁は後ろを振り向いて驚いた。そこには、人間ではないものがいた。

「リュウ、なんでお前がいるんだ？」

「リュウ、クッてまさか」

魁が驚いた表情をして言った。

「そうだ、魁。こいつが、初代キラにノートを渡した死神だよ」

「なあ、そんな説明いから。俺のノートを知らないか？」

「ノート？」

「さっきおっさんから、まだお前のノートが人間界にあるから回収して来いって言われたんだよ。まったくあのクソじじい」

「おい、ちょっと待て。お前ノートなくなったんじゃないのか」

「そうなんだが、俺にも見当がつかないんだよ」

リュウが、悩んでいると魁が

「おい、リュウこれはどういうことだ！」

「俺にも分からないんだよ」

死神（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の日曜日になります。

捜査

デスノートの一部を手に入れた捜査本部は、キラ逮捕に向けて大きく踏み出したのであった。

「さて皆さん、これで我々はキラ逮捕に向けて大きく踏み出したんですが、まだキラが誰かわりません。そこで、もう一度テレビを使ってキラに呼び掛けてみようと思います」
と、Jが言った。

「もう一度、キラに呼び掛けるのか？」

夜神が、Jに聞いた。

「はい、そうです。キラに私たちが、ノートの一部を持っていると発表します」

「それって、キラを挑発することになるんじゃない？」

松田が、冷静な表情をして言った。

「まあ、そうですが、夜神さん。確かノートには、死神がつくと仰っていましたよね？」

「ああ、そうだ。ノートの所有者には、必ず死神がつくというルールになっている」

夜神が、Jの質問に答えた。

「それを利用して、死神をここへと呼び出して、目の取引をします」

Jが「目」と言った瞬間、その場にいた捜査メンバーは驚いた。「Jは、死神を呼び出して目の取引を言ったのであった。」

「目の取引だと！」

「そうです夜神さん。死神と目の取引をします。この私が」

「正気かJ、目の取引をするという事は寿命の半分以上を削られるということだ。それを分かっていつているのか」

「分かっています、でも、これが最も効果がいい方法なんです」

「しかし」

「お願いします、夜神さん。もう、これ以上被害は出たくない、

早期に解決するにはこの方法しかないんです」

そう言いながら、「は椅子から立ち上がり夜神の前に行き言った。

「……本当に、寿命の半分を失うことになるがそれでいいんだな」

「はい、分かっています」

「分かった、君がそこまで言うならやってくれ」

「ありがとうございます、夜神さん」

そう言うと、「は夜神の手を取って握手をした。

捜査（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

放送

「が、捜査本部にノート一部があるという事をテレビを使って公表すると捜査メンバーに伝えてから数日後、テレビで生放送された。皆さんこんにちは、今日は警視庁より重要な発表があるという事で急遽、番組を変更して生放送でお送りしています。では、皆さんご覧ください」

そう言くと、テレビの画面は真っ白の画面に変わり

「皆さんこんにちは、」です」

とモザイクがかかった音声が届いた。

「今日は、キラにあることを伝えたくてテレビ局の貴重な時間を頂いております。では、本題に入りたいと思います。キラ、私たちキラ事件日本捜査本部は今、あなたがどうやって人を殺せるか知っています。そして、人を殺すのに必要な道具も分かっておりますそれを保有しています。キラ、もうあなたの時代は終わります。これからの時代はもうあなたは必要ありません……以上で、発表を終わります」
そう言くとテレビの画面は、真黒になり砂嵐が流れた。

テレビの放送を家で見ていた、魁とリュウとリュウは驚きを隠しきれないでいた。

「ま、まさかノートが日本捜査本部のところにあるとは意外だったよ」

と言いながら、魁は頭を上に向けて天井を眺めていた。

「さてと、リュウ。もう俺は行くわ」

「行くのか？」

「ああ、ノートの場所も分かったしさつさと人間界とはおさらばしたいしな」

そう言くとリュウは、外に出ていった。

「これからどうする、魁？」

リュウが魁の方を向いて聞いた。

「どうしようかね、捜査本部にノートがあるということはもうルールの事もばれてるし殺し方もばれているだろ」

「こりゃ、最初から計画を見直す必要があるな」

とリュウが、本棚の上に置いてあったリングを食べて言った。

「そうだね、計画の見直しをしなきゃいけないね」

そう言っていると、勉強机の前に行きデスノートを広げた。

「なにする気だ」

「キラは、動揺なんかしてないっていう事を見せつけているんだ」とリュウの質問に答えながら、魁は犯罪者の名前をノートに書いていった。

放送（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、未定です。

対面

「Ｊがキラに対してのテレビ放送をして翌日、Ｊと捜査メンバーは捜査本部にいた。」

「まだ、ですかね」

「言いながら、Ｊはお茶を飲んだ。」

「あれから、一日経ったのに現れませんね」

「そうだな」

松田と夜神が話す。

「そろそろ、現れていい頃なのに」

「もしかして、我々の事に気付いていないじゃ」

と松田が、慌てた表情で言う。

「それは、ありませんよ。昨日、全部の放送局が放送したんですから気付かないはずないでしょう」

「そうですね、普通なら気づきますよね」

とＪが言ったことに、苦笑いをしながら言った。

それから数分後、沈黙した空気が漂う中その時はやって来た。

「あ、あなたは？」

Ｊが驚いた表情で言う。Ｊの目の前にいたのは、死神のリユ クだつた。

「俺は、リユ クだ。以前のキラに、ついていた死神だ」

「あなたが……」

Ｊは、口を開けて驚いていた。

「久しぶりだな、リユ ク」

「久しぶりだな、夜神。夜神、俺のノートはどこにあるんだ？」

そう言いながらリユ クは、辺りをキョロキョロと見渡して言う。

「ああ、それならちよつと待ってくれ」

と夜神が、ノートの一部が入っている金庫のパスワードを入力し始めた。夜神がパスワードを入力しているときＪが突然、椅子から立

ち上がり

「死神。私と目の取引をしてくれませんか？」

「ん？目の取引？」

「Jの方を向いて、リュ　クが言う。」

「はい、私と目の取引をしてください」

「別にしていいものが、あんた寿命を半分に削ることになるがそれでもいいのか？」

「構いません」

「……そうか、分かった」

そう言つと、リュ　クはJの近くまで行きJの目に向けて手を伸ばした。

そして数分後

「目の取引は終わった、これお前は今他の奴の名前が見えるはずだ」

「そうですか」

「は、リュ　クにお礼を言う。」

「んじゃ、俺は帰るわ。ノートも回収できたし」

と言つて、リュ　クは背中を向け羽を広げて飛ぼうとした時

「ちよつと、待ってください」

「Jが、飛び去ろうとしたリュ　クを止める。」

「なんだ？」

「あなたはそのまま、キラが捕まるまで捜査本部に留まってもらいます」

「は？」

「もし、このままあなたが去ってしまえば私は再び目を失ってしまいます。それに、あなたは飛び去ることはできません」

「どういうことだ？」

「そのノートの、所有権は今私が持っていますから。死神はノートの所有者につくとルールにも書いていますよね」

とJがノートの所有権は自分が持っている、リュ　クに言つと「ちえ、まっすぐ帰れると思つていたのに。でも、キラとJの戦い

を見るっていうのも面白いかもしれないな」
「では、これからよろしくお願いします」
「そう」は、言った。

対面（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

対策

「がリュウと目の取引をした頃、魁は自宅の自分の部屋で黙々とパソコンの画面に表示されている犯罪者の名前をノートに書き続けていた。」

「しかし本当、この世界は悪を犯す者が多いな」
シャーペンを机に置き、手を伸ばしながら言う。

「どうということだ？」

とリュウが魁の横に行き言う。

「見てみる」

そう言うとき魁は、ノートをリュウに見せる。

「俺がデスノートを拾ってから、たった数カ月しかたつてないのに、ノートの半分のページは使ったのに犯罪者は全く減らない」

「まあ、確かにな」

リュウがノートを見ながら言う。

「でも、犯罪を犯す者は少しずつだが減ってきている。この調子で行ったら、犯罪のない理想の世界ができる」

とパソコンの画面を見ながら言う。

「これを見てみるよ」

と言ってリュウは、魁が指差したパソコンの画面を見ると、画面には世界の犯罪の割合が表示されていた。

「確かに、少しずつだが減ってきているな」

「そうだろう」

とくすくすと笑いながら言う。

「今日はこれぐらいに、しておこうか」

そう言うとき魁は、ノートを閉じてノートの隠し場所に置く。

「なあ魁よ。犯罪者の割合が減ったのは言いとしてお前、これからどうするんだ？」が、ノートを持っていたるんだぞ。このまま」を、放置しておくのか？」

とリンゴを食べながらリュウが言う。

「放置なんかしないよ、一刻も早く」の名前と顔を知らなければならぬ。でも、どうやって顔と名前を知るかを今、その方法を考えているんだよ」

「そうか、本当に厄介な状況になったな」

「本当、厄介な状況になったよ。リュウ」

苦笑いしながら魁は言った。

対策（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

作戦

捜査本部では、Jがリユクと目の取引をして今後の事について話し合われていた。

「これからどうするんですか、J」

松田が聞く。

「……キラと直接、対決しますよ」

「直接……だと」

夜神が驚いた表情をして言う。

「直接キラと対決です。死神、ノートを持った人間は寿命が見えないんですよ」

「そうだ、デスノートの所有権を持っている人間の寿命は見えない」とリユクが言う。

「それを利用して、キラを捕まえます」

「どうやって？」

相沢がJに聞く。

「キラにテレビやラジオ、新聞などのマスコミの力を使って出来る限り再び呼びかけます」

「また、呼びかけるのか」

「はい、そしてその呼びかけの内容は『キラ、今お前の正体は確実に分かっているこのままだとお前を捕まえるのも時間の問題だ。そこでだキラ、私たちと取引をしよう。取引をするとき、犯罪者を殺すのに使った道具を持ってお台場の古びた倉庫に来てください』と」

「でも、それってキラを支持している人たちが自分がキラだと主張して結局、意味ないんじゃない」

と松田が言う。

「まあ、確かにそうですが。その時は、待ち合わせの場所に来た人全員の顔を見ればすぐに分かります。私には寿命が見えています、

寿命が見えていない人こそがキラ」

「しかし、キラが来なかったらどうするつもりなんだ」

夜神が言う。

「キラは、必ず来ます。そういう奴なんですキラは」

「しかしだな……」

「もし、キラが来なかったらその時はその時です。また、新しく作戦を考えたらいいことです」

「……分かった、君にかけよう」

「ありがとうございます、夜神さん。では早速、松田さん、相沢さん各報道機関に連絡してキラに対する呼びかけをしたいと伝えてください」

「分かりました」

「了解しました」

そう言って二人は、その部屋から出て行った。

「いよいよ、キラと決着をつけられる。勝つのは私ですよキラ」

「Jよ、本当にこれで決着がつくと思っているのか？」

リュ　クがJに聞く。

「もちろん、これで今までのことがすべて終わると思います」

「そうか」

と言ってリュ　クは、机の上に置かれていたリンゴを食べた。

作戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

6月28日にブログで、「二次小説発表会（夏）」をやりたいと思います。「二次小説発表会」は簡単にいえば、報告会みたいなものです。

ブログのURLは

二次小説の館

<http://ameblo.jp/sakaginntoki/>

二次小説の屋敷

<http://sakatagintoki.blog.so->

[net.ne.jp/](http://sakatagintoki.blog.so-net.ne.jp/)

決戦

「Jの作戦は翌日、各報道局により伝えられた。テレビ・新聞ともこのことを大きく報道した。」

「キラ、今お前の正体は確実に分かっているこのままだとお前を捕まえるのも時間の問題だ。そこでだキラ、私たちと取引をしよう。取引をするとき、犯罪者を殺すのに使った道具を持って明日お台場の古びた倉庫に来てください」

魁はこの報道を、自宅のテレビを見て初めて知った。

「あいつら、本当にノートの事を知っているのか？」

魁が、疑問に思いながら言う。

「知っているじゃないのか、おそらくリュウがJに言ったんじゃないのか」

魁の後ろに立って、リュウが言う。

「たぶん、そうだろうね。あの死神が言ったんだろうね。本当、厄介な奴だよ」

と溜息をつきながら言う。

「どうするんだ、魁よ？ Jの呼びかけに賛同するのか？」

リュウが聞く。

「そうだね、賛同してみようかな」

ノートに犯罪者の名前を書きながら言う。

「お台場に、行くのか？」

そうリュウが聞くと、魁はリュウがいる方を向いて

「そろそろ、Jを潰さないところちも動けなくなるから今のうちにJを潰さない」と

「そうか、行くのか」

「明日は、面白いものが見えるかもしれないよ。リュウ」
クスクスと笑いながら言う。

「面白いもねえ、Jが死ぬところを見るってか」

「そつだよ、明日の取引は楽しくなりそつだよ」

そつ言つて、再びノートがる方を見てパソコンの画面上に出ている犯罪者の名前をノートに書きだした。今、Jと魁の直接対決が始まろつとした。

決戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になり、次回で最終回となります。

対決

翌日魁は、デスノートを鞆の中に入れてJとの待ち合わせの場所
お台場の倉庫へと向かった。そして、倉庫の前に着くと魁は

「リュウ、いよいよJと決着がつくよ」

とリュウに言った。

「そうだなでも、もしこれがJの罠だったらどうするんだ」

「罠だろうと、これで決着がつく。Jがキラかの」

そう言うとき魁は、倉庫のドアを開けた。ドアを開けるとそこには
仮面を覆った大人が数名椅子に座っていた。

「初めまして皆さん、あなたたちがキラの日本捜査本部のメンバー
ですか？」

魁が、仮面を覆った人たちに聞く。

「そうです。私たちが日本捜査本部です」

一人の男性が言う。そして、一人の男性が椅子から立ち上がり覆
っていた仮面を捨て

「初めまして、高橋魁さんいえ、キラ。私がJです」
と言った。

「ど、どうして俺の本名を！！」

魁が驚いた表情をして言う。

「あなたは、そこにいる死神に聞かされていないんですか？ 目の
ことを」

「まさか、死神と目の取引をしたのか！！」

「はい、しましたよ」

「Jがそう言うときJの隣に、リュウが現れた。

「リュウ、お前死神界に帰ってなかったのか！！」

とリュウが言う。

「ああ、なんか面白そうだったから」

リュウが淡々と言う。

「キラ、今私にはあなたの本名が見えてみます」

そう言つと」は、椅子の後ろに手を伸ばしあるものを取りだし魁に見せる。

「あなたには、これが何か分かりますか？」

そう」が聞くと魁は、それを見て

「さあ、分からないな」

と言つた。

「そうですか、実はこれ以前のキラが使っていたデスノートの一部なんですよ」

」が、紙切れをひらひらとさせて言う。

「嘘だろう、なんで以前のキラが持っていたノートの一部があるんだよ」

「では、書いてみましょうか？ この紙切れに」

と言つと、」はポケットからボールペンを取り出し紙切れに魁の名字を書きそして

「あと一文字、あなたの『魁』と言つ文字を書いて40秒後にあなたは心臓麻痺で亡くなります」

そう」が、魁に向けて言う。

「……書いてみるよ、どうせはつたりだろう。そんな二年前のキラが使っていたノートなんて、ありえない、絶対にありえない」

「そうですか、今回のキラが以前のキラより劣っていてよかったです」

」はそう言つと、最後の一文字を紙切れに書きこんだ。

「これで、あなたとお別れですキラ」

「さて、別れるのはどっちかな？」

そう二人が言つと、リユウが

「……楽しかったぜ」

と小声で言う。そして、40秒後異変が起きた。

「……、そ、そんな」

一人の人間が、地面に崩れるように倒れた。

「どうやら私の勝ちのようですね、キラ」

倒れた人間は、魁だった。

「どうやら、そうらしいね。でも、キラの復活でまた戦争はなくなり犯罪の発生確立も7割減少した。いかにキラが、世界にあたえる力が大きいか」

「いえ、あなたはただ人殺しです」

「……」

「Jがそう言った時には、魁は息を引き取っていた。

「J、これで良かったのか？」

一人の男が仮面を捨てて聞く。

「はい、これでよかったです。報道メディアには、キラは現れなかったと伝えてください」

「分かりました」

そう言うつと、その男はその場から出て行った。

「それでは、最後の一仕事です」

そう言うつてJは、紙切れに何かを書きそれをポケットに入れ

「皆さん、キラの遺体の処理の方はよろしくお願いします」

と言い残しJは、倉庫から出て行った。

それから数週間後、日本捜査本部の解散がJから通達され日本捜査本部は解散した。そして、それから数日後今度は信用性は低いJの死亡が発表された。Jが死んだかは誰にもわからないが死亡したというニュースが全世界に流れた。キラの死亡により、世界の犯罪の発生の確率は再び増加しまるでキラが存在していなかったような世界になった。

対決（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回で最終回とさせていただきます。今まで、ご覧いただき本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3180o/>

DEATH NOTE 新たなる神

2011年9月12日14時58分発行